

## C. F. マイヤー 『アンジェラ・ボルジア』

著者	島谷 謙
雑誌名	文藝言語研究. 文藝篇
巻	17
ページ	87-99
発行年	1990-01
その他のタイトル	C. F. Meyer : Angela Borgia
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/13705">http://hdl.handle.net/2241/13705</a>

# C. F. マイヤー『アンジェラ・ボルジア』

島 谷 謙

## 序

19世紀スイスの作家C. F. マイヤーの『アンジェラ・ボルジア』<sup>1)</sup> (1891年)は作者が完成させた最後の作品である。彼の作品の多くは歴史小説の体裁をとり、『アンジェラ』もまた例外ではない。それは作者の歴史に対する深い愛着と造詣を感じさせる。マイヤーが作品の舞台を同時代にではなく、過去の歴史のうちに設定したことは、しばし彼の現実体験の乏しきや身近な現実の諸問題からの逃避に由来するものと受け取られてきた。しかし、その作品世界は人間の生死を軸とする運命の在り様を陰影深く描き出し、秀れて芸術的であると共に象徴的かつ普遍的である。マイヤーは、彼より8歳年上の同国人である歴史家J. ブルクハルトと同様、イタリア体験を契機として歴史の彼方に見出される人間の生に思いを巡らした。ブルクハルトは『ルネサンスの文化』(1860年)において、文化の歴史的な発展や因果関係を探るのではなく、時代を越えた美や個性、普遍的な人間像を求め、捉えようとした。マイヤーはブルクハルトの著作に想を得て詩を作り、出来上った詩集を贈って敬愛の念を示した。両者のルネサンス観およびそれと裏腹な同時代に対する距離感は極めて同質な精神性を感じさせる。そうしたマイヤーの歴史小説においては、葛藤、苦悩、不安、喜び、幸福といった生の在り様はルネサンスであれ、19世紀であれ基本的には変わらないとする確信のようなものが窺われる。以下、それを作品を通じて具体的に見てゆきたい。

## I 〈ルクレツィアとアンジェラ〉

『アンジェラ・ボルジア』の舞台となるのはルネサンスの北イタリア、エス

テ家の支配するフェララ宮である。物語はスペイン出身の悪名高い法王アレックスandro 6世の娘ルクレツィア・ボルジアが三度目の政略結婚の相手であるフェララ公アルフォンソの許へ興入れするところから始まる。ルクレツィアは常に法王である父と兄チェーザレの意志の支配を受ける。チェーザレはマキャベリが理想の君主像とみなした冷酷な戦士である。彼女は二人目の夫を兄の手で殺されながらも、なお兄を敬慕し続けた。マイヤーが作品の時代背景を知る上で参考としたF. グレゴロヴィウスの『中世ローマ史』によれば、ルクレツィアは同情を呼ぶ悲劇のヒロインであると同時に「誘惑する妖婦」であり、「贖罪するマグダレーナ」でもある<sup>1)</sup>。マイヤーは史実に拠りながら、複雑なルクレツィアの内面を描き出すことで肉付けしていく。彼女は道徳とは無縁な魂を持ち、「父譲りの若返りの力によって、全く忘却の河に湯浴みしたかのように、毎朝起きる度に新しい女に生まれ変わっていた。」(S. 6) 彼女は金髪で晴れやかな眼を持ち、生命力と結びついた叡知をそなえていた。そして周囲の人々の反応の内に自分の罪深さを感じ、ローマで過した日々を過去の悪夢として精算したいという気持ちをも日ましに強めていく。第三の夫、フェララ公アルフォンソとの結婚は、父法王と兄チェーザレの政治的な意図を併いながらも、ルクレツィアにとっては厭わしき過去との訣別の好機であった。

統一されることなく分裂し、諸外国の介入に脅やかされる「崩壊した時代」(S. 44) 背景の中で、政治的に利用されながら現実的にしたたかに生き抜いてゆく法王の娘ルクレツィア。彼女に対して、従妹アンジェラは従姉に欠落した倫理感を一身に引き受けた女性として描かれる。幼くして両親を惨事のために失い、修道院で養育され、道徳的な美と完全さを教えられたアンジェラ。彼女は「身も心も混乱させる」(S. 11) 苛酷な時代環境の中に在って、健気な反抗心を抱く。彼女の潔癖な倫理感は無縁者である法王と罪深いルクレツィアの代りに自らに贖罪を課すほどである。そのアンジェラがルクレツィアによって修道院から連れ出され、侍女として共にフェララへ往く。物語はこの二人の女性の行動を対比しつつ展開される。その上でなお、この物語の主題を形成しているのは、アンジェラとアルフォンソ公の末の弟ジュリオとの関係である。作品においてルクレツィアの存在は、歴史の表舞台にはほとんど登場することのないアンジェラの姿を鮮明に浮かび上らせるべく描かれるのである。マイヤー自身、二人をルネサンスの画家ティツィアーノにおける世俗的な愛と神的な愛との対比として捉えている<sup>2)</sup>。

## Ⅱ 〈アンジェラとジュリオ〉

アンジェラは法王庁にあってすでに従兄チェーザレの口を通じて、アルフォンソ公の末の弟ジュリオについて聞かされていた。チェーザレによれば、ジュリオは謙虚で天分豊かな青年ではあるが、官能に溺れている。従って、「高貴な女性の手で導かれる相応しい」(S. 12) この時、チェーザレの暗示を受けて、アンジェラはジュリオとの対面を心に期する。そして、このチェーザレの促しを伏線としてのみ、初対面のジュリオに対するアンジェラの叱責は理解される。彼女がルクレツィアと共にフェララに着いた時、君主の結婚に伴い恩赦を受けた罪人達の最後の一人として、気品ある青年が牢獄から出てくる。彼は人妻を誘惑し、その夫を刺殺した科で服役していた。そのジュリオの魅力的で罪深い目を見つめるアンジェラの心は怒りと悲しみにつき動かされる。集まった人々の前で、「惜しい人です。本当に惜しい人です。ドン・ジュリオ、神の裁きを怖れなさい」(S. 16) と我を忘れて叱責し、恥ずかしさと興奮の余り、ひきつったように嗚咽するアンジェラ。彼女の言動は居合せた人々の同意を引き出したのみならず、当のジュリオをも狼狽させるのである。それは劇的な場面設定と展開を好むマイヤー特有の導入部であり、読み手を一気に作品世界の渦の中へ巻き込んでいく。

ルクレツィアがフェララ宮の女主人として振舞い、周囲に多くの崇拜者を集める一方、アンジェラも又、人々の心の内に波紋を与える。大公アルフォンソの弟で枢機卿のイボリートは僧職の身でありながらアンジェラに求愛し、弟ジュリオに激しく嫉妬する。イボリートは、放蕩を重ねながらも無垢な魂、「純粹で真実な心」を失わずにいるジュリオの輝いた目、その「底まで見通すことのできる神秘的な泉」が真実を求めるアンジェラを魅きつけずにおかないことを確信する。(S. 45) そして、イボリートの手下によるジュリオ襲撃の結果、ジュリオは失明する。史書では、片目を失ったとされるが、作品においては両目を失う。以後、史書に拠れば、ジュリオは三番目の兄フェラルランテと謀って復讐を企てるが捕えられる。フェラルランテは獄中で死に、ジュリオにいたっては50年以上幽閉され、釈放されたのは死ぬ3年前である。そしてアンジェラは一連の事件の後、ジュリオやイボリートとは別の男性と結婚した。<sup>3)</sup> 一方、作品においては、盲目となったジュリオの転落と再生、アンジェラの献身、そして外なる光に代わる内なる光を獲得していく過程が物語られていくこととなる。

### Ⅲ 〈ジュリオとイボリート〉

アンジェラに叱責された時を境として、ジュリオは「自分はもはやもとの自分ではなくなった。」「僕の望みはひとつだけだ。憎しみに、冷やかに僕から顔をそむけた彼女が、今一度、燃えるような顔を僕に向けて、僕を脅かして欲しい。前よりも激しく。……」(S.30)と語る。そしてそのすぐ後でジュリオの夢の中にアンジェラが現れ、彼を裁く。

——彼は今までに覚えのない不安に襲われる。すると突然、様々な時代、国々の裁判官達に取り囲まれていることに気がつく。中央に座るカール大帝が唇を動かすことなく、審判の始まりを告げる。全てのものが消え失せた後、アンジェラが自分の上に身を屈めている。彼女は彼への愛と彼の罪を語り、彼の目を抉り取るよう促す。そして、逆う彼をおさえて両方の目に赤い液体をひとしずくずつ垂らすとすさまじい痛みが全身を走り、深い闇に包まれる。——(S.34, 抄出)

この悪夢はやがて実際に彼を襲う。それは嵐の予感(S.49)、接近(S.53)そして到来(S.54)と共に描かれることで、この物語前半の一つの頂点であることが示される。イボリートはアンジェラに向ってジュリオの放蕩を非難する。それに対してアンジェラはジュリオを裁く権利は自分にしかないかのように、その非難に同意することなく、逆にジュリオの目の美しさを賞める。嫉妬に駆られたイボリートは即刻手下の者にジュリオを襲わせ、眼を抉り取らせる。その時、嵐は時満ちたように稲妻を併いつつ訪れ、地上の悲惨の上に沛然と雨を降らせる。

失明は光に包まれていたジュリオの転落を象徴する。

「なぜあなたは僕から光を奪ったのだ。なぜ僕の全てであり、唯一のものを奪ったのだ。」(S.54)

ジュリオはイボリートの緋の衣に顔を埋めながら叫び、意識を失う。大公は公国の要人であるイボリートの犯行を黙視する。しかし、イボリートは裁かれることなくして事件の直後に発病する。弟の血痕のついた緋の衣を見て身震いした彼は、やがて床に伏し、嘔吐を催す。昼と夜の見境がつかなくなり、悪夢にうなされる。

——悪夢の中で、自分の欲望や野心の犠牲となった者達の行列が近づいて来る。行列の中央に、血にきみれた空ろな眼窩の大男が歩いている。その時、突然青空が拡がり、その中央に大きな秤が揺れている。青空に二つの大きな目が現れ、赤い涙を秤の皿の上に落す。やがて、すべては不安と闇の中に消える。——(S.74, 抄出)

被害者ジュリオの失明前の悪夢と、加害者イボリートの犯行後の悪夢は共に目をめぐる強迫的なイメージである。一方は目を奪われ、他方は奪った目に脅かされる。そして、両者とも悪夢の果てに漆黒の闇に包まれる。この闇から抜け出すためには、内なる光の獲得が求められるのである。

#### IV 〈ジュリオをめぐる人々〉

失明し、倒れたジュリオは直ちに彼の領地ブラテルロへ移される。そこで彼は「不幸の様々な段階を踏み越えた。初めは昼夜の別なく長い間、闇の中に呻き続けた。やがて肉体と魂の発熱がおさまると、喜びを欠かせない性格に従って、柔らかな大気に触れ、花の香りを求めた。」(S.56) 悪夢の中でひとたび光を失った後、彼は「夢の中で永久に失われた晴れやかな青空を、憧れるように見上げながら探し求めた。」(S.37) そして実際に盲人となった彼は庭園の並木道を歩みながら、「もはや見ることのできない光をせめて感じ取ろうとした。」(S.55) 悪夢とそれに対する反応は現実には繰り返されるのである。

盲人となったジュリオの許には、異った思いを抱く者が三人、それぞれブラテルロへ見舞に訪れる。

詩人アリオストは友としてジュリオを慰め、その魂に喜びを与えようと様々に試みる。アリオストは宿命は非人格的なものであり、幸福であろうと不幸であろうと、感情を抑制することこそが尊いと語る。そして当時フェララ宮廷に実在した詩人に似つかわしく、ストア的な苦悩の忍従、受身的な英雄精神を讃えた歌を友に語って聞かせる。それに応じてジュリオの心の闇は明るさを取り戻す。しかしながら、かつて「人生の王者」(S.27)であった時の彼を喜ばせたはずの陶醉と歓楽に満ちた生命の歌をアリオストが歌う時、ジュリオはその歌から耳をそむける。さらに彼はかつての愛人をも身から遠く去る。彼女に代って彼の心を潤したのは、領内に住む農夫達の飾り気のない純粋な同情である。勤勉で足ることを知る彼らの存在が彼の関心を引く。やがて彼は「今まで所属

していたのとは異なる世界、異なる階級の人間の中に身を置き始めた。それは不幸な人や悩める人、ハンディを負う人や廃嫡された人などの階級であり、充足した人や享楽に耽る人とは明らかに異なる条件のもとにあり、異なる掟に従っていた。」(S. 59) 盲目となったジュリオの心の拡がりが見られることで、作品世界は深まりを獲得する。彼は自分を襲った悲劇の原因を人間の憎悪や盲目的な運命にのみ求めず、「少なくともある瞬間には、自分に罪があるとみなした。」(S. 59) フリオストは友の姿を見守りつつ、これ以上、相手の心に立ち入ることは慎むべきであると知る。ただ二人は荘園の並木道を手を取り合って、互いに憐むことも羨むこともなく、兄弟のように歩いていく。その時、「愛は二人の間のあらゆる差異を消し去っていた。」(S. 60) のである。

第二の訪問者である三番目の兄のフェルランテは、快方に向いつつあるジュリオの心を乱し、復讐と謀反へと駆り立てる。幼い時から絶えず恐怖に脅かされ続けてきたフェルランテは、あらたに弟を襲った悲劇を目の当りにする。そして、弟以上にいかかわしい自分の身に不安を募らせ、弟に対する人々の同情を背景に、二人の兄、アルフォンソとイポリートに対する謀反を企てる。彼はイポリートへの憎悪と、イポリートを裁こうとさえしないアルフォンソへの怒りを駆り立て、弟を引き込もうとする。運命に耐えることにのみ甘んじていたジュリオはこの時、第三の訪問者であるアンジェラの告白を契機として、兄の謀反に加担する。

ひとりで馬を駆り、人知れずブラテルロの地を訪れたアンジェラは、草原の片隅に置かれた石のベンチに腰を下し、散策に出るジュリオを秘かに待ち受ける。歩き慣れた草原をひとり歩む盲目のジュリオは彼女の訪れを知らず、その側に腰を下し、癒されることのない己れの思いを口ずさむ。彼の言葉にじっと耳を傾けるアンジェラ。それは愛する相手の魂の揺曳に憐憫を込めて触れる神秘的な時の<sup>ニビツアエー</sup>顕現である。ジュリオはダンテの地獄にならって、地上にあって苦悩する者、不幸な者、絶望する人間の姿を段を追って思い描き、不幸の最下層に盲人を置く。

奈落に漂う苦しみよ――

我は王なりしが追われ……

まことに人生の王なりしが。

我が神の目の見しものは、

すべて我がものなりし。

されど、暴徒に襲われて……

めい、  
盲となり、

この上なく惨めなさまとなりぬ。(S. 66)

その時、アンジェラは話しかけ、生の喜びを徒らに否定することこそより不幸であると語る。驚きつつ問いかけるジュリオに、アンジェラは自分が愛するがゆえに彼に不運を招いたと告げる。ジュリオは彼女の愛の告白に対して、互いに不幸の谷へ突き落とされたのであり、「僕の目を新しく作ることはできないのです。」(S. 67) と述べて、相手から遠去かる。彼はアンジェラの愛が自分の不幸を埋め合わせるなどできないという認識にとりすがり、孤独に生きる道を選ぼうとするのである。

## V 〈ジュリオとフェルランテ〉

ジュリオはアンジェラの告白を通じて事の真相を知り、二人の兄への復讐を誓う。しかし、フェルランテの企てに加担する旨の手紙を書き送った直後、二人は捕えられ、裁判にかけられる。法廷における二人の言動は対照的である。ジュリオは寛黙で控え目な口ぶり、悄然とした態度で、自分の一生を宿命であると語る。そして、新たに兄の血を流すことなく済んだことにむしろ安堵する。彼は懺悔を行うべく、神父マメッテを呼び寄せ、死を覚悟する。処刑を待つ間、彼は農民の子供に<sup>むしろ</sup>箆の編み方を学び、不安な時を解消しようとする。

一方、フェルランテは被判や二人の兄を呪い、自らの道化気質に従って、道化の衣装を身にまとい、鈴の音と共に虚無の中へ跳び込みたいと言う。ジュリオへの凶行以来、悪夢にうなされて衰弱した枢機卿イポリートは再び弟の血を流すことに耐え切れず、大公に特赦を求める。その結果、二人は終身刑に減刑される。だが、フェルランテは特赦を拒んで言う。——自分は人生を愛することができずに嫌い、徒らに浪費してきた。そして、「到る所、愚かな仮面と空虚と、羨望と無価値しか見出せない。」それゆえ、命が与えられることより、「自我とその不安から解放されることを願う。」(S. 85) ——そして、その場で毒をあおって自殺する。

兄の自殺を前にしたジュリオは取り乱して泣きながらも、やがて目の見えぬ



頭を大公の方へ向けて言う。——自分は生命の富を愚かにも浪費してきた。しかし、失明し、最も貧しき者の一人となった今、与えられた生命に深く感謝する。そして、悩める者の仲間として苦悩に耐え忍んでいくつもりである、と。

(S. 85)——フェルランテは常に恐怖に脅かされ、それをかわし続け、道化のように振舞う中で、生と自我の拠り所を失って自滅する。それに対してジュリオは、不条理な力によって光を奪われながら、それに耐えて生き延び、「新しい生命」(S. 85)を自覚するに至る。彼の再生もしくは転生の歩みは、転落以前の放蕩や、虚無的な兄の言動と対比され、説得力を増すのである。

## Ⅵ 〈ジュリオと神父マメッテ〉

ことの推移を見守り続けていたアンジェラは、特赦が下った後、移送されるジュリオの上へ薔薇の花を投げかける。盲目の頭を彼女に向けて応えるジュリオ。彼は一旦ポー河の河口にある島へ移送された後、再びフェララ宮内の「忘れられた塔」へと秘かに連れ戻される。ジュリオを慕う者達は、彼が幽閉されている場所を探し当てる。幼き日の養育者である老哲学者ミラビリはジュリオに再会し、やつれ果てたかつての教え子に古典の英知を授けようとする。しかし、高貴な人々を模範とし、克己の勝利を説くストア派の哲学に、ジュリオは近づくことのできない厳しさを感じる。

彼の心により大きな慰めを与えるのは神父マメッテである。この人物はミラビリ同様、史実には見られず、マイヤーの創意による。マメッテは農民の子として生まれ、アンジェラ同様幼くして両親を失い、僧院で育ち、フランチェスコ修道会の僧となる。神父はかつて不慮の事故で死につつあった職人を手厚く看取ったことがあった。ジュリオはその姿を目撃し、心に留めた。以後、一度も接触することのなかった相手を、ジュリオは死刑宣告を受けた際に呼び寄せる。そして獄中の身となって以来、神父は彼の友となる。神父は幸福の尽きることをない泉が在ることを告げる。——それは貧困に徹すること、無所有であることを通じてのみ見出すことができる。無所有であるとはすなわち、噴水の水盤のように己れを空しくすることで神の愛を受けかつ与えることである。これこそ幸福と自由に至る門である。(S. 116—7)——マイヤーは既に『ローマの泉』(Der römische Brunnen)という詩の中で水盤の清謐を歌い上げている。物語の中では、水盤は人間の在り方を象徴するものとして、より深い意味を担うに至る。ジュリオは初め、光を失った自分がこれ以上貧しくなることは思い

もよらず、さらに利己的な苦痛さえ富として放棄しなければならないと言われ、とまどう。とはいえ、聖フランチェスの教えは詩人アリオストも哲学者ミラビイも達することのできなかった、愛を求める彼の魂の奥底に触れる。さらに神父の言葉はジュリオ一人にとどまることなく、アンジェラの熱い魂を静め、道徳に無縁なルクレツィアの不安な心をも癒すのである。(S. 113) ここには、それ以前の作品において全ての価値を相対化するかに見えたマイヤーのイロニカルな眼差しは見られない。詩人(アリオスト)の形象化の営みにも哲学(ミラビイ)にも一定の限界を認め、宗教的な方向へと向う作者最晩年の信仰告白を読み取ることもできる。又、そうした文学に対する内在的な批判と反省を含み込んだ作品とも言えよう。いずれにせよ、単に葛藤や孤独、不信や絶望を描くことではなく、その克服と有和ないし光明を求める姿勢が示されている。

アンジェラはジュリオが塔に移送される姿を目撃して以来、彼の許を秘かに訪れ、見守り、励まし続ける。三年の歳月が過ぎ、彼女の愛は後悔と憐憫を併って深まっていく。そしてある日、足繁く訪れるアンジェラにジュリオは自分の新生を告げる。——かつて自分は過去を代えることができない、失われた目を取り戻すことはできないと言った。しかし今、自分には精神の眼が開いた。目を失ったことが自分を救う結果になった。さもなくば自分は享楽に溺れ、破滅していたに違いない。(S. 129) ——一旦死を覚悟した後に与えられた生を「新しい生命」として受け止めた彼は、神父マメッテと対話し、アンジェラの献身を受ける中で、「精神の眼」を獲得するに至る。それは失明し、幽閉され、全てを失った地点に立たされた中で、己れを空しくすることで逆に全てを受け容れることができるようになったことの結果である。それゆえ、一度は拒んだアンジェラの愛を今度は素直に受け容れるのである。そして彼は荘園の農夫達との交感を懐しく思い起こす。マイヤーは作品を通じて、神父の教説そのものを主張するのではない。ジュリオが転落と再生の歩みの中で、神父の言葉を自分の運命に相応なものとして受け止める姿を描くことで、教説を受肉化させている。救いは外から観念として与えられるのではなく、あくまでも悩める者の内部に育つのである。作品の魅力は聖フランチェスコの清貧の教えに還元されることなく、作品そのものの展開が多様な側面を示しながらジュリオの転生を描き出しているその全体に求められるのである。

塔の中にある礼拝堂の窓格子に額を押しつけ、ジュリオを見守り続けるアンジェラ。彼女の額には赤く深い筋が十字架の印のように刻み込まれる。その姿に気づいた神父マメッテの立会いのもとに、二人は密かに結婚する。のちに神

父はルクレツィアに問いつめられて答える。二人を結ぶものは国の掟を越えた力である、と。そして闇に捉えられたまま死を前にしたイポリートが良心の苛責に耐えかねて、ジュリオの恩赦を求めることで、二人は公に結婚を認められる。かつてアンジェラが叱責せずにはいられなかったジュリオの享乐的な生は悲劇的な体験をくぐり抜け、転生を遂げる。ジュリオはこの転生を経ることなしにアンジェラと結ばれることはなかったのである。

## Ⅶ 〈『アンジェラ・ボルジア』と『ジェーン・エア』〉

失明し、絶望の淵へと突き落とされながら、神の愛を認め、運命と和解するに至る点で、『アンジェラ・ボルジア』はC. ブロンテの『ジェーン・エア』(1847年)に相似する。『ジェーン』においては男(ロチェスター)の正妻の存在が障害となり、正妻の焼死とジェーンの得る遺産が二人の将来を結びつける。『アンジェラ』においてもジュリオの放蕩は裁かれねばならず、大公の恩赦とジュリオの領地が二人の将来を保証する。しかし、共に牧歌的な結末ではなく、結末に至る切迫した過程が焦点となる。『ジェーン』において、失明した男は神を呪い、「暗い死の影の谷間<sup>6)</sup>」を通り抜ける。やがて彼は神の意志を認め、運命と和解する。『アンジェラ』においてもまたすでに見てきたようにジュリオは失明し、満ち足りた者と悩める者とを隔てる「深い谷の反対側をよじ登る。」(S. 85) やがて彼は「新しい生命」を実感し、「精神の眼」を獲得する。

各々の題名でもある二人の女主人公も又、共に孤児として育てられ、一途な性格、逆境にあって孤立した立場にあるなど、時代背景の差こそあれ、多くの共通点がある。二人は共に男性に対して自分から先に愛を告白し、失明した相手に献身的に尽す。「自分は彼の左手であり、彼の瞳である。<sup>5)</sup>」と言うジェーンと、「愛と悲しみを共にする」(S. 125) と誓うアンジェラ。「彼は私の命であり、私は彼の命である。<sup>6)</sup>」と語るジェーンと、「彼女は与えることで幸福となり、私は受けることで幸福となる。」(S. 134) とジュリオに認識させるアンジェラ。さらに、両者の間に生まれる子供に対する同質の表現さえ見られる。「私達の最初の子供は彼自身の目を受け継いでいた。<sup>7)</sup>」というジェーンと、ジュリオの失われた目が二人の子供の目の内に若々しく蘇る日の訪れることを希望するアンジェラ。(S. 134) 両者には極めて相似た男女の幸福の形が示されている。それは表現が似ているというより、似た立場に置かれた男女が示す心

の動きの相同性であると言えよう。そして、男性の側が弱者となることで、女性の愛を受身的に受け容れるという構図からは、男性優位の近代社会における男女関係の在り様が逆説的に浮かび上がってくる。

さらに両者に見られる興味深い特徴として、夢ないし夢の果す予示的な性格がある。すでに見た通り、ジュリオは夢の中でアンジェラに裁かれる。それは実際の失明を予示する。『ジェーン』においても、ジェーンは別の男の求愛に屈しかけた時、自分を呼ぶ男（ロチェスター）の声を耳にし、荒野へ飛び出していく。共に自分が運命的な関係に在る相手との対話を無意識の内にいき、その対話で示された方向へと導かれていく。トーマス・マンは夢における運命の告知に関するショーペンハウアーの思想を次のように要約している。

「夢の中で我々自身の意志は、予感されることなく、仮借ない客観的な運命として現れる。夢では全てが我々自身の中から生まれる。〈中略〉この現実においても又、我々の運命は我々の最も内奥の、我々の意志の産物であるかもしれない。<sup>9)</sup>」

マンの言葉を言い換えるならば、仮借ない運命も当人の意志とつながりがあるということである。ジュリオもまた、夢を見る以前にアンジェラによる再度の叱責を自ら求めていた。そして現実に光を失った後、彼はそれを至当なものとして受け止めるに至る。そこに人間の心理と運命の深い相関関係が捉えられている。

もとより両者には時代背景のみならず、様々な差異がある。『ジェーン・エア』はヴィクトリア朝の片田舎を舞台とし、無名と言ってよい男女を主人公としている。物語は一人称による、幼年期に遡る回想の形を取っている。男の失明と再生の過程は彼の回想の中で語られるに過ぎない。一方、『アンジェラ』は作中人物以外の語り手による三人称の物語である。陰謀と暴力が渦巻くルネサンスの宮廷を舞台とし、史上名高いボルジア家一族を登場させ、文飾に富んだ流麗な文体で書かれている。作品全体の質感はおおよそ異なる。それは『アンジェラ』を色どるもう一人の女性、ルクレツィアをめぐる展開を指摘することにより明らかである。こうした様々な違いにもかかわらず、今まで見てきたような似た側面が在ることは着目されてよいと思われる。

『アンジェラ』において、物事に執着する男達はいずれも望みをかなえることなく、破滅する。謀反を企てたフェルランテの自殺、内乱を企てたチューザレ・ボルジアの戦死、兄嫁ルクレツィアに邪恋する裁判官ストロツィは謀殺

され、弟ジュリオに嫉妬したイポリートは衰弱死する。彼らはいずれも自らの欲望の虜となり、死に至る。大公を別にすれば、残る4人の兄弟の中で生き延びることができたのは、己れを無にすることのできたジュリオ一人である。そして彼を支えた人々——アンジェラ、神父マメッテ、詩人アリオスト、老哲学者ミラビリ——もまたいずれも献身的で無私な精神の人々である。

マイヤーはルネサンスを舞台に、「崩壊した時代」(S. 44) にあってなお、あるいはそうした時代であるがゆえに、「個人の人格が全て」(S. 44) であることを語りかける。その眼差しはルネサンスの中に己れ自らの時代を見つめる。彼が新しい時代を切り開く担い手としたのは、『尼僧院のプラウトッス』においても、『アンジェラ』においても若き女性であった。一方、彼の他の作品の男性の主人公達、宗教改革の闘士フッテンや『聖者』のトマス・ベケット、スイス独立運動の闘士ユルク・イエナッチェら、彼らはいずれも志半ばにして倒れる。マイヤー自身、野心を抱き、物事に執着する男達が破滅した後には現れる「永遠に女性的なもの<sup>9)</sup>」について語っている。放蕩を重ねていたジュリオが生き延びることができるためには、光を奪われ、ひとたび精神的に死ななければならなかった。そして自らの運命に受身的に耐え忍ぶことを通して、彼は苛酷な時代を生き抜く道を見出すのである。マイヤーは欲望と無私の精神それぞれの行方を見据えると共に、内なる光すなわち「精神の眼」の獲得に至る迄の「肉体の苦悩と魂の格闘<sup>10)</sup>」を描き出したのである。

## 注

使用テキストは C. F. Meyer: *Sämtliche Werke, Historisch-Kritische Ausgabe* besorgt von H. Zeller u. A. Zäch (以下 SW と略), Bd. 14, Benteli-Verlag Bern, 1966.

作品からの引用に際しては、その該当頁を引用文末尾の括弧内に示した。

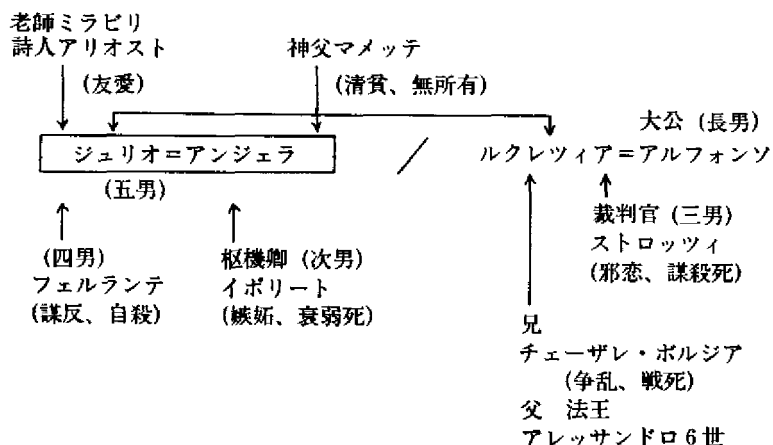
- 1) SW. Bd. 14, S. 182.
- 2) ebd, S. 160.
- 3) ebd, S. 173f.
- 4) 『ジェーン・エア』新潮文庫, 67版, 下巻403頁
- 5) 同書411頁(抄出)
- 6) 同書384頁(抄出)
- 7) 同書412頁(抄出)
- 8) T. Mann *Gesammelte Werke in 12 Bänden*, Bd. IX, Frankfurt am Main (Fischer) 1960, S. 487.
- 9) SW. Bd. 14, S. 159.
- 10) G. Hertling: C. F. Meyers Epik, Bern (Francke), 1973, S. 171.

## 参考文献

- K. Fehr: C. F. Meyer, Stuttgart (J. B. Metzler) 1980.  
 D. A. Jackson: C. F. Meyer, Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1985.  
 F. Weishaar: C. F. Meyers "Angela Borgia", Marburg (Johnson) 1928.  
 U. Hansen: C. F. Meyer 《Angela Borgia》, Bern (Francke) 1986.

なお、作品中の人物関係を図にして示す。

## 〈無私精神〉



## 〈欲望〉